

ようこそ
私の研究室へ40

山極寿一



アフリカの熱帯林で人類の起源を知り未来を守る 生物多様性の実態を解明し、野生生物との共存の道を照らします。

PROFILE

山極寿一 (やまぎわ・じゅいち)
京都大学大学院 理学研究科 教授

1952年、東京都生まれ。霊長類学者。1975年京都大学理学部卒業。ルワンダ共和国カリソケ研究所客員研究員、日本モンキーセンター研究員、京都大学霊長類研究所助手などを経て京都大学大学院理学研究科 副研究科長に。専攻は人類進化論。1978年よりアフリカでゴリラの調査を開始。1986年からザイール共和国(現コンゴ

民主共和国)のカンジ山で、ゴリラとチンパンジーの共存関係を中心に、熱帯林全般の組織的調査を現地研究者らとともに実施する。現在の調査地はガボン共和国のムカラバ国立公園。2008年より地球規模課題対応国際科学技術協力事業の研究課題に取り組む。



名前をつけて行動を記録する 日本オリジナルの世界基準

「ゴリラは、私が彼らのルールを犯すと、『いけないよ』と諭してくれるんです。彼らは自分が人間よりも上と思っている。そんなゴリラをペットにはできないでしょうね(笑)」

だらかな笑顔で語るのは、京都大学大学院理学研究科教授の山極寿一さん。30年以上前からアフリカでゴリラの調査を行っている。主たる手法は「個体識別によるフィールドワーク」だ。「群れの中に入り、ゴリラ一頭一頭に名前をつけ、行動を記録することで、彼らの社会を理解し、人間の社会と比較する。人間に近い霊長類を通じて人間や人類の起源を知るという発想から生まれた手法なのです」

これは、「ジャパニーズ・メソッド」とよばれる日本オリジナルの世界基準。その発祥の地が、山極さんが学生時代に学び、現在は教授として指導にあたる京都大学の動物学教室だ。1950年代に日本の霊長類学の祖・今西錦司さんが提唱し、ニホンザルのイモ洗い行動が伝播する過程を調べてサルの文化的行動として発表すると、世界中から反論が起こった。社会も文化も人間に固有というのが当時の常識だったのだ。名前をつけることが擬人化につながるとも批判された。しかし、やがて今西さんらの説が認められ、いまでは世界中の霊長類学者が名前をつけて研究をしている。

アフリカのゴリラ調査は欧米が先行していたが、山極さんは1978年、日本のパイオニアとしてアフリカに渡った。ゴリラの群れだけでなく欧米の研究者たちのなかにも単身で乗り込み、議論をするうちに、日本と欧米との霊長類学の差を実感したという。

「日本では個体同士の関係が社会を決めると考えます。欧米では食物の量などの生態学的条件を重視します。だから、同じゴリラの社

山極さんの研究の足跡をたどる



1980～

ダイアン・フォッシー(右)がルワンダに設立したカリソケ研究所の客員研究員に。欧米の研究者と激論を交わす。



1987～

フォッシーの死を機に、ザイールのカンジで現地や日本の研究者とともに熱帯林全般の総合的調査をスタート。



1992～

カンジにNGO「ボレボレ基金」設立。地元の人々の手による自然環境保全活動に向けた記念すべき第一歩。



2000～

ゴリラの生息密度が高く人付けが可能などの条件に合ったガボンのムカラバを新たな調査フィールドに。



2008～

ムカラバでJST-JICAのプロジェクトがスタート。これまでの実績を生かし、ガボン科学技術センター熱帯生態研究所とともに活動中。

会を前にしても見ているものはまったく違う。そんな彼らとの議論は刺激的でした」



惨殺の悲劇を機に知った 地元の人々との関係の大切さ

「当時、私の心にあったのは『ゴリラのことを知りたい』という思いだけです。それが、ある事件を境に大きく変わりました」

1985年、アメリカの霊長類学者ダイアン・フォッシーがルワンダ共和国のカリソケ研究所で惨殺された。犯人はゴリラ密猟者との説が有力だ。彼女は自然保護の立場から彼らと激しく争っていた。当時、山極さんは日本にいたが、数年前までカリソケ研究所の客員研究員としてフォッシーとともに調査を行い、ゴリラと密接な関係を築く姿に敬意を払っていた。そんなフォッシーの悲劇は、山極さんにとって研究者人生の転機となる。

「ゴリラの密猟は問題ですが、彼らにとっては生活の手段でもある。声高に反対するだけでは憎しみしか生まれなくて痛感しました」

絶望のなか、モンキーセンターの研究員として関わった屋久島での活動が指針となった。

「猿害地で人とサルの共存をテーマに研究をし、成果を屋久島の人たちに知ってもらおうと、現地で特別展を実施しました。それをきっかけに地元の人々と『あこぎ塾』という組織を立ち上げたのです」

サルに限らず島の自然について、地元の人々の協力のもと、観察会や討論会を行い、理解を深めた。2年間の活動だったが、これを機に地元主導の自然保護活動が根つき、やがて世界自然遺産登録にもつながった。その経験をアフリカでも生かそうと考えたのだ。

自らに課した条件は2つ。1つは地元の研究者を育てること。もう1つは地元の人々による自然保護のNGOを立ち上げることだ。

「それまで、ゴリラ調査を行うのは海外から来



研究室はゴリラが暮らすアフリカの熱帯林

研究テーマが広がっても、熱帯林というフィールドこそが研究室であることに変わりはない。地元の研究者の協力のもと、熱帯林に足を踏み入れ、野生生物に愛情を持って接することが調査の出発点となる。

た研究者で、地元の人々は単なる労働力でした。これではいけないと思ったのです」

新しくザイール共和国(現コンゴ民主共和国)のカフジ山に研究フィールドを求め、地元の研究者とともに調査を開始。NGO設立の準備も始めた。山極さん自身は1991年に勃発した内戦のため去ったが、1992年には地元の人々の手でボレボレ基金というNGOが誕生。いままも活発な活動を行っている。



ゴリラのほかチンパンジーや植物も含め熱帯林全般を調査

「カフジ山では、私の研究自体も大きく変わりました。ゴリラだけでなくチンパンジーも対象

に、植物なども含めた熱帯林全般の調査を始めたのです。現地の研究者のほか、日本から4人の研究者を呼び、チームを組みました。1人ではなくチームで研究をするのも、フォッシーの死を機に心に決めたことです」

カフジ山を去った後は、ガボン共和国のムカラバ国立公園をフィールドに、やはり熱帯林を総合的にとらえる視点から研究を進めている。そして2008年より、JSTと独立行政法人国際協力機構(JICA)が連携して実施している地球規模課題対応国際科学技術協力事業の課題として「野生生物と人間の共生を通じた熱帯林の生物多様性保全」に取り組み始めた。

「ゴリラのことをもっと知りたいという気持ちは、

まだ私のなかにあります。しかし、熱帯林全般について調査をするうちに、森林の伐採による熱帯林の減少の危機的な状況や、その背景にある地元の経済的な停滞を知り、ゴリラを守るためにも、一刻も早く行動しなければならないと強く感じました。そして、これを解決するためには、地元の人々自身に問題意識を持ってもらい、動いてもらうことが欠かせません。幸い、このプロジェクトを通じて、地元の人々の意識も変わり、人材も育ちつつあると感じています」

世界をリードし続けてきた京都大学理学部の霊長類学研究は、いま、山極さんのもとでさらに発展し、人類の起源ばかりでなく人類の向かうべき道をも照らそうとしている。■

研究の概要

このプロジェクトで目指すのは、熱帯林生態系の保全技術と環境保全型観光事業の創出だ。生物多様性の高いガボン共和国ムカラバ国立公園の熱帯林で、ガボン科学技術センター熱帯生態研究所と協力して、生息する動植物の種類や現存量に関する調査などを実施。生態系マップの作成や、優先的に保全すべき種の特定などを行う。また、自然保護と地元経済への貢献を両立させる環境保全型観光事業

としてのエコツーリズムを、人間との接触による野生生物への影響にも留意しながら推進する。これらを地元根づかせるため、ガボンの研究者やエコツーリズムのための人材育成にも取り組む。

また、山極さんが率いる京都大学大学院理学研究科 生物科学専攻 動物学教室の人類進化論研究室では、ヒトの進化を動物行動学、社会学、人類学、生態学などの側面からとらえ、狩猟採集民、牧畜民、漁労民に関する生態人類学的研究や、オナガザル類、類人猿を対象とした霊長類社会の研究など、多彩なフィールドワークを行っている。



アフリカは生物多様性豊かな人類のふるさと!